

ポワレの挑戦：

ドレス・パターンとテキスタイルを手がかりとして——その5

京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター 深井晃子

パターン作成：京都服飾文化研究財団レストアラー 伊藤ゆち子

POIRET'S CHALLENGE: A STUDY OF PATTERN AND TEXTILE OF HIS DRESS

Akiko FUKAI, Chief Curator, The Kyoto Costume Institute

This paper discusses a dress (AC11551 2006-17-1AC) produced in the 1920s, which was owned by Denise Poiret, the wife of Paul Poiret. This work is especially interesting in that a Japanese style seen in a black, family crest-marked jacket (haori) is expressed with Japanese silk fabric. Around 1903, Poiret presented a coat named “kimono coat,” which looked both Chinese and Japanese. The present work, produced in the 1920s, is very different. It closely resembles a black haori, which was popular in Japan in the Meiji Era (1868-1912). In fact, Poiret referred to Japanese kimono of the same age and introduced this influence in his design. This work confirms that he had renewed his interest in Japan.

はじめに

KCI が所蔵するポワレ作品の中に見られる、服地としては例外的な生地が用いられている作品に着目し、そのドレス・パターンと共に作品の特徴、さらにはポワレのデザインにおける特性を検討し続けてきた。これまでにそこから導き出されたのは、ポワレがいかにドレスメイキングへの新しい試みを行っていたかという点だった。本稿で新たに上げるのは、ポワレの妻、ドゥニーズの所有であった1920年代のドレス(AC11551 2006-17-1AC)である (Fig. 1)。本品はドゥニーズに由来するが、レーベルはない。本品がとりわけ興味深いのは、黒紋付の羽織といった風情の日本のイメージを日本の絹地で具現化していることである。

形状

1920 年代半ばの筒型シルエットのドレスである。グレーのボーダー柄のある黒い綾子縮緬の一種が使われ、ドレスはそのボーダー部分を前立てとして使っている。前立ては身頃

からそのまま裁ちだされて、ストールのように首に巻いて、前で打ち合わせて着る。その上から幅広のベルト（8 cm）を着装する。ドレスから裁ちだしたグレーの襟が着物の襟のような効果をあげ、黒地は羽織を着物の上に羽織っているという風情をだしている。またベルトは、帯のような意識で使われている。幅広の袖も、筒袖のような印象を与える。全体としてドレスは、黒い羽織を着装しているといった印象である。

使用された用布

106 cm幅の絹の綸子縮緬。分銅繫ぎ紋の中に梅紋が配置された地紋「梅花入分銅繫模様」の上に、S字型の輪つなぎ模様が絞りでおかれた鼠色部分。そこは片側だけのボーダー柄と不規則に飛ばされた丸紋が絞りで染め残され、残りの部分は黒に染め分けられている（桶染めという手法によるものかもしれない）。裏に、日本の絹物に良く見られる朱印が押されているが、判読不明である（Fig. 2）。これらの事実と目視から受けた印象からは、日本製の布であると思われるものの、本来的な生地用途は特定できない。輸出用あるいは布団地などに使われる絹地であったのかもしれない。

パターン（裁断図）と構成

各パーツは、前ページの下図のようになる（Fig. 3）。ただし、先述のように使われた用布の出自が不明のため、各パーツの配置は、あくまで仮定のもとに便宜的に置いたものである。別の衣服であったものを縫い解いて再制作した痕跡は見当たらず、新しい生地が使われている。

パターン1は前・後身頃と右スカートを形成し、パターン2と3はC辺同士が縫い合わせられ、左スカートになる。パターン1のウエストラインをF点からG点の位置まで裁断し、A辺同士、B辺同士を縫うと、左右のスカートがつながる。スカートのウエストラインを84 cmになるまでギャザーをよせ上身頃につけ、D辺同士、E辺同士を縫い合わせ、ドレスとなる。

考察

ポワレはマルチヌ工房を立ち上げ、独自のテキスタイル制作を行うほど、テキスタイル・デザインに対して深い関心を寄せていた。本稿に先立ち、彼が頻繁に本来は服のための用途ではない布を用いて制作する、また、世界各地のエキゾチックな布に深い関心を寄せ、それらを用いた服の制作をしていたことを、すでに実証してきた。また、それらの布を用いて服を作る際、使おうとする用布はさまざまな制約、すなわち幅や大きさ、形状の

制約が生じていたことも明らかにし、しかし、ポワレがむしろそうした制約を肯定的な条件として捉えて、新たな服の造形に挑戦しようとしていたと結論づけた。

本品が、日本のイメージを具現化したことは明らかである。そのために用いられている生地も日本製の絹地である。ポワレは、すでに 1903 年頃、「キモノコート」と称する日本とも中国とも区別がつかないコートを発表して以来、1908 年頃にも、着物のシルエットを思わせるホブル型のコートを発表している。これらについては、展覧会カタログ『モードのジャポニスム』（1996 年）を参照していただきたいが、江戸期のお引きずりのシルエットがイメージの元となっている。

しかし、1920 年代の作品であるこのドレスは、それらとはまったく異なって、明治以降に流行することになる黒い羽織を着装したときのイメージを持っている。つまり、ポワレは、同時代の日本の着物を参照しており、本品は彼の日本への新たな視線を証言する例といえよう。使われた生地についての正確な検討ができないまま取り上げたのも、ポワレのドレスデザインの特徴を示す作品として極めて興味深い一例と考えられるからである。

（※肩書は掲載時のものです）